慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	朝鮮古蹟圖譜第十冊(朝鮮總督府發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.172(528)- 173(529)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ボサマ小便壺（しよべつぼ）で顔（ツラ）洗らた、其手でお釋迦様（さん）に團子上げだ、お釋迦嗅（くさえ）ごて鼻まげた。

ミジョケナイ　一〇九

メジョケえネえ、ミゾケナえ　は憐れだといふ意味のやうだ。乞食の子が雨に濡れてショボ〳〵來るのを見て、メジョケネえといふやうだ。

唾　一一一　ツバギ。ツバゲ　（ギ・ゲ半）

唾　二二　アグド　（グド半）

虎杖　一一二　ドンゴエの事かと思ふ。

「火葬場（ヤキバ）のドンゴエ」といふ譬がある。火葬場のドンゴエは早く大きく成長るので、柔になつて居るから、觸れると直ぐ折れ易い故に、人間も身體のみ高く大きくて、何の役にも立たぬ子供をいふやうだ。

出双庖丁　一一四　ナマグサボーヂョー。ナマグサボーヂョ。

私が「ホーヂョ」といつたら何んの事か解らなかつた、それで「ホーチョー」と濁らずにいつたら直ぐ解つた。

直綿　一一四　マヲダ　（ダ半）

白水　一一六　シロミヅ

余り長くなつたから此位で擱筆。（昭和五・八・十七、國分剛二）

京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄（考古學教室編　昭和五年三月發行）

京都大學の考古學教室がその陳列品の豐富をもつて知られてをることは云ふまでもない。大正十一年同陳列品の圖錄を公けにして以來昭和三年に再版が出版され、更に本年に至りその增補三版が公けにせられた。その蒐集品の多くは既に研究報告書により繪葉書により學界に紹介せられてをるけれども本圖錄中にはそれ以外のものまた尠少ならぬ。その上兎に角全てが一つに纏められてあるのは、重寶此上もない。今後同陳列館を訪れるものの是非前に一覽すべきものであり、また既に一見した者も之によつてその記憶をよみがへらし得るであらう。圖版全て百二十日本朝鮮支那歐洲埃及希臘西亞諸國印度アメリカにわたり、微を盡し、細を穿つてをる。これで郵稅共五圓の定價は、けして高價でない。たゞ難をいへば、所々少しく誤植脫落あること、たとへば第六五圖に數字番號なきことなどである。國史東洋史西洋史研究者が座右に備へをくべき良書の一つとして本書を推薦したい。（希望者は京大考古學教室宛に申し込むべし）（松本信廣）

朝鮮古蹟圖譜第十册（朝鮮總督府發行）

朝鮮に於ける木造古建築は、數乏しくかつては日本建築の母胎となりしその優秀なる技術も僅かに高麗期の二三及び朝鮮後期のものによつてその餘韻を窺ふのみである。本圖譜は、宮殿建築の代表とも云ふべき景福宮、昌德宮、昌慶宮の寫眞及びプランを收めてをる。雄大壯麗なる景福宮勤政殿、石柱美しき慶會樓・風致愛すべき昌德宮秘苑内の諸小亭等吾人を魅する諸建築は鮮明なる圖版によつて餘蘊なく紹介されて居る。添へられた景福宮進饌圖

は、極東典禮の研究者に資するものであらう。いつもながら巨費を投ぜられて半島文化を中外に宣傳しつゝある當路者に深き感謝の意を表せねばならぬ。（松本信廣）

筑前須玖史前遺跡の研究

（京都帝國大學文學部考古學研究報告第十一册）

第十册「出雲上代玉作の研究」の出版後濱田博士梅原末治氏の外遊により暫く中絶した京都帝大考古學研究報告は、今回其第十一册として島田貞彦氏の「筑前須玖先史時代遺跡の研究」を上梓した。著者が、昭和四年九月上旬同處に於て、甕棺十一箇と其中に副葬せる細形銅劔一口を發見せし發掘調査の結果を錄したものである。遺跡は、福岡市東南約二里、雜餉隈の西方約十町に位置する。發掘約八日にわたり、四地點を調査した。發見された石器の數は、比較的乏しく、土器は、彌生式に屬し、何れも壺、坏、臺、高坏の口緣部及び底部の破片であり、完全なるは當の合口甕棺だけである。これは砂を多く交ゑた粘土を用ひ、多くは良く平均に燒成せられて、鮮な赭色を呈し、不充分なる燒成の箇所が時に淡褐色を示してをる。陶車を使用せることは、器形の整正なること、器の內壁に上下に並行した階段狀の凸凹の遺存することによつて知られる。甕棺より發見された銅劔は、全長一尺一寸、莖は短くして長八分五厘、中央において折れてをる。手法精巧にして支那よりの輸入品らしい。その外鑑鏡破片數箇（四片の周緣部と淸白鏡、星雲鏡の紋樣を殘すもの二個）、並びに角製管玉を發見した。須玖及附近の遺跡は既に古くより學界の注意を惹いてをる。著者は、次に既發見の關係遺物と遺跡について述べ、ついで他地方甕棺關係遺跡と遺物について語り、殊に文政五年の發見に係る筑前國糸島郡三雲村遺跡については、靑柳禮信著「筑前國怡土郡郡三雲村古器圖考」を卷末に複製附載してをる。最後に、この甕棺の一般的特徵について語り、その三十度前後の斜位を以て埋葬せられしは伸展葬の意味にも叶ひ、甕の耐久にも都合よくしたものと考へられると斷じ、上下兩甕略ぼ同大同形なるもの先づ存して、ついで、上甕著しく小形にして蓋の形式をなすもの發生せしならんと說き、伴出鑑鏡の年代より合口甕棺の年代漢代の而かも遲からざる時代に屬することを推定し、これが、金石併用期のものであり、其時期は、他の遺跡に於ける王莽の貨泉の發見により西紀一世紀に置くべきであると論ぜられてをる。次に甕棺と伴ふ銅劔銅鉾が組合箱式石棺よりも出土することに叙及され、たゞこの銅武器が後者にあつては細形のものに限らず廣形平形のものをも出すので、この型の石棺は、甕棺につぎて流行したるならんと論じ、甕棺使用はその遺跡より神獸鏡の類の鑑鏡を全く出さない處から三國時代には衰亡せしならんと述べ、要するに合口甕棺なるものは我が金石併用期に於ける彌生式土器なる製陶術の輸入と共に地方的に發生した一個の特殊的葬法であり、その行はれたる地方は我が西陲大陸文化の最も容易に浸潤すべき自然的地方であり、畢竟周末漢初に於ける支那文化東漸の結果西日本に波及した漢文化の影響の一端を示現するものに外ならぬと結んでをる。

附載論文として梅原末治氏著「須玖岡本發見の古鏡に就いて」に